

令和3年度 第1回
松本市・山形村・朝日村中学校組合
総合教育会議議事録

松本市・山形村・朝日村中学校組合教育委員会

令和3年度第1回松本市・山形村・朝日村中学校組合総合教育会議

令和3年12月22日(水)

午後3時開会

松本市役所 第一応接室

議 事 日 程

1 開会

2 あいさつ

3 懇談項目

鉢盛中学校における不登校・不適應の生徒への対応について

鉢盛中学校の現状と課題について

意見交換

4 閉会

出席者名簿

【会議構成員】

管理者（松本市長）	臥 雲 義 尚
教育長（松本市教育長）	伊佐治 裕 子
教育長職務代理者（山形村教育長）	根 橋 範 男
教育委員（朝日村教育長）	百 瀬 司 郎
教育委員（山形村教育長職務代理）	平 林 昌 廣
教育委員（保護者代表（山形村））	宮 澤 美 香

【鉢盛中学校】

学校長	中 川 満 英
-----	---------

【松本市教育委員会】

不登校支援アドバイザー	横 林 智 子
-------------	---------

【事務局職員】

事務局長	藤 森 誠
事務局次長	赤 羽 志 穂
事務局次長	塚 田 雅 宏
事務局次長	高 野 毅
事務局指導主事	牧 野 圭 介
事務局次長補佐	小 澤 弥 生
事務局主事	松 尾 昌 樹
山形村教育委員会	小 林 好 子
朝日村教育委員会	上 條 靖 尚

総合教育会議

懇談項目

事務局長（藤森 誠） それでは、皆様、大変お疲れさまでございます。

ただいまから令和3年度第1回松本市・山形村・朝日村中学校組合総合教育会議を開催いたします。

私は、当組合の事務局長の藤森誠と申します。本日の進行を務めさせていただきますので、どうぞよろしくお願いいたします。

本日の会議ですが、公開とさせていただきます。お手元の次第により進行させていただきますので、よろしくよろしくお願いいたします。

それでは、初めに、この会議を主催いたします臥雲管理者からご挨拶をお願いいたします。管理者（臥雲義尚） 今年も残すところあと僅かになりました。また、お忙しいところを、今日は、教育長をはじめ、教育委員会の皆様方にお集まりいただきまして誠にありがとうございます。

3市村中学校組合の第1回の総合教育会議ということでございますが、昨年度のこの会議では、各市村の小学校の基本教育方針、さらに、各市村に先駆けてICT化に取り組みました鉢盛中学校の取組状況、そうしたことを切り口としまして、これからの教育につきましてもの意見交換をさせていただきました。

今日は、鉢盛中学校における不登校、不適應の生徒に対する対応をテーマといたしまして、中川学校長から現在の状況、学校が抱える課題につきましても説明をいただき、意見交換をお願いをしたいと考えております。

教育委員の皆様におかれましては、課題、そしてあるべき姿を共有をして相互の連携を深めていけることができると考えております。

新型コロナウイルスがようやく落ち着きを取り戻して、平常な日常に戻りつつあるわけですが、また、年明け以降、不透明な面も残っております。この2年近くの間、もちろん社会全体に大きな影響が出たわけでありますが、とりわけ子どもたちにとりましては、学校に行けない状態が続いたり、また、社会全体がコロナで厳しい局面に置かれたことの影響を心身ともに受けた期間になったと想像をいたします。

私たちが生徒一人一人の思いに寄り添いながら、子どもたちの可能性を不透明な未来に向けて広げていくことができるように、今日は自由闊達な意見交換を行いたいと思っておりますので、よろしくお願いいたします。

事務局長（藤森 誠） 続きまして、伊佐治教育長からご挨拶をお願いいたします。

教育長（伊佐治裕子） 皆さん、こんにちは。

一言、教育委員会を代表して、ご挨拶を申し上げます。

今、臥雲管理者からもお話がありましたとおり、コロナの影響等で、子どもたちがいろん

な心の影響を受けていると思います。そんな中、今日は、不登校、不適應の生徒に対する支援ということで、このことをテーマに話し合うこととしております。

先日、中学校を訪問させていただいたときに、鉢盛中学校の先生方が、ICTの機器を駆使をして、校内中間教室から教室の自分のクラスの授業が見られるような工夫をしたり、様々な工夫を先生方が配慮してくださっている様子を見させていただきました。

一人一人の子どもの状況を考えますと、学校での先生と相性が合わないとか、いじめに遭ってしまったとか、そういった状況はもちろんあると思うんですけれども、家庭的なことを背景に、おうちの方の支援を受けられないとか、家庭での状況の中で苦しさを抱えて不登校になってしまっているお子さんも大勢いると思います。

そういったお子さんへの支援というのが一番難しいとは思いますが、教育と福祉、それから医療と連携をして、そういったお子さんを救っていくことを、これからはますます考えていかななくてはならない状況になっていると思います。

そして、もう一つは、先ほど、コロナのお話がありましたけれども、不登校の数、30日以上欠席の数を見ますと、やはり令和2年、どこの自治体も全国的に増えている状況があると思います。松本市も同じですし、鉢盛も同じような状況があると思うんですが、いろんな学校の先生方や子どもたちの話を聞きますと、コロナで休校だったり、分散登校をしたりという状況がありましたけれども、普段、35人というクラスの人数が当たり前だと思っていたことが、改めて、分散登校で少人数でのクラスの学びということを経験したことによって、少人数だったら生き生きとしていられるけれども、大人数でいることに、息苦しさを感じてしまうというケースも聞いております。

そうしますと、改めて、もう少し子どもたちが少人数の集団の中で伸び伸びと学び合う、そういったことも、これは日本全国ですけれども、必要な状況にあるのではないかとということも感じております。

そんなことも考えながら、今日は鉢盛の不登校、不適應の問題について、意見交換をしていきたいと思っております。

臥雲管理者には、今後ともお力添えをよろしくお願いいたします。

事務局長（藤森 誠） それでは、これより議事に入ります。

初めに、鉢盛中学校の不登校、不適應の現状と課題について、中川校長から説明をお願いいたします。

学校長（中川満英） それでは、お手元の資料を使いまして、説明をさせていただきたいと思っております。

本年度より鉢盛中学校で校長を務めさせていただいております中川満英と申します。よろしくお願いいたします。

それでは、着座にて説明をさせていただきます。

1番の現状であります。

(1) の表をご覧ください。

23年度からのものを準備しましたが、28年度からご覧いただきたいと思います。

不登校の人数であります。上から4段目になりますが、28年度から20人、16人、12人と減少傾向でありました。しかしながら、30年から、その12を下としまして、15、19と、上がってきております。そして、全体の在籍比も5.97、6.00です。そして、昨年度は10.80と、校内の10人に1人が不登校、または病気欠席も含めると、長期欠席という状況であります。そして、本年度も、11月末現在では、全体として35人、在籍で7.59ということであります。もう一つお願いします。

令和2年度に、その他で5人ということがありますが、こちらは、コロナ禍でということ、文科省の欠席理由の分類の中でも、欠席が非常に多い生徒で、校長が認めた出席しなくてもよいという日も加えると30日を超えてしまった生徒のことで、5名いるということになります。なので、それで加えて計47名ということになっております。

(2) をご覧ください。

令和2年度の長期欠席生徒の内訳であります。本校、県、全国で比較できるようにしてありますが、数値は%であります。

不登校は、本校4.37と、県、全国に比べ高いのですが、それ以上に、やはり病気による長期欠席者が非常に大きくなっているということでもあります。これは、通院等により、起立性調節障害や統合失調症など、通院により治療を続けている生徒は、こちらでカウントしております。

また、イの理由別長期欠席生徒数であります。要因をそこにあるように6つに分類させていただきました。なお、これは重複もありますので、数値を見ますと、左から2つ目のいじめを除く対人関係、学習・進路に関すること、そして、右から2番目の家庭に係る状況等が理由としてありますが、これらは非常に複合的に要素が絡み合っておりますので、1つだけということではなく、これゆえに対応に非常に苦慮しているところでもあります。

なお、病気というもののカウントは、下にありますが、けがを含めた本人の心身の故障等により、入院、通院、自宅療養等ということでもあります。

そういう中で、(3) の相談室登校ですけれども、本校は、組合で自立支援教員を配置いただいております。その教員を中心に、相談室を運営させていただいておりますけれども、令和3年度、今年度は6名ということでもあります。

また、波田にありますあかり中間教室、ここには記載がありませんけれども、現在、2名の生徒が通っております。

それでは、次のページをご覧ください。

今年度の取組みです。前学校長からの願いを受け、私もそれを引き継がせていただき、様々な取組みを全教育職員で取り組んできております。

アセス等を用いた人間関係、集団づくりやスクールカウンセラー、スクールソーシャルワ

一カー、また、3市村の行政部局との連携を大切にしながら、支援を進めてきております。

そういう中で、(1)であります。やはり発達障害のある生徒の合理的配慮ということに非常に大切に職員で考えてきました。松本養護学校の教育相談員には、4月をスタートに年3回、来校いただき、職員研修を進めております。

また、適宜、本人、保護者の対応もいただき、対応する上で大変ありがたい取り組みをしていただいております。

また、星印の4つ目ですけれども、スクールカウンセラーによる生徒の授業観察であります。そちらも県の加配によるスクールカウンセラーに本校に来ていただいております。年33回、大体午前中4時間という形で悩み相談、生徒授業観察も含めまして、取り組んでいただいております。

また、2番のところであります。やはり子どもたちに分かる授業ということで、いろいろなところを組み合わせていただいております。一番下のコミュニティ・スクールの枠組みを活用し、地域に密着する総合的な学習の時間ということで、今年度、特に地域をキーワードに、山形村、朝日村、また、今井地区に実際に子どもたちが出向き、いろいろな地域の方々に教えていただく取り組みを大切にしていきたいと思います。

3番目です。点の上から4つ目です。松本市教育委員会元気アップ相談や松本保健福祉事務所思春期保健相談等、教育相談を活用しております。不登校支援アドバイザーの横林先生には、これまでも年3回、ご来校いただき、各3市村の関係者の方々と連携を取りながら、協議を進めております。

また、一番下です。1人1台端末の活用ということで、不適應、不登校の生徒には、声をかけ、実際にそれを使った学習を、アドバイスをして取り組んできております。

また、不適應、不登校ではなくても、子どもたちが、授業のまとめや、また、夏休みには、課題、意見文等、これを使いたいんだということで、いろいろな子どもたちの要望も多く、1人1台端末を活用させていただいております。

そのような中で、課題等、検討事項です。本校の教職員たちから、こういうことはできるとありがたいということをご提示させていただきたいと思っております。全てが要望とか、または、すぐできるとかということではなくて、これから私たちも検討していきたいと思います。

(1)です。対応できる職員の増員ということで、現在も県への不登校支援、加配教員も要請しております。やはり、学級担任等、支援チームの意向を酌んで家庭訪問したり、登校支援に向けて、生徒や保護者、情報共有や相談に当たる職員、または、放課後、夜間等に登校する生徒の対応に当たる職員を確保したいと考えております。

現在、1つのクラスで不適應、不登校がいる多いクラスは6名とか、5名という状況です。本当に先生方、一生懸命、空いている時間、朝、また放課後、夜も、子どもたちを受け入れ、または家庭訪問しておりますけれども、これだけ複数になってくると、なかなか1人の教員、

または、チームだけでもなかなか厳しい状況であります。

次に、イであります。保健室でも相談室でもない、一時避難場所の確保と対応職員ということ。現在、図書館登校をしている生徒も3名おります。図書館の先生にいろいろお願いをしながら、そこに担任や学年の職員が出向き、少し休息する場所として使わせていただいております。

また、(2)です。スクールバスの運用ということが先生方からいろいろ出てきております。今回も小学校に私も出向き、来年度の受入れのところもいろいろ相談させていただいておりますが、中にはやっぱり、自分の自転車で登校するということが非常に厳しく、また保護者もいろんな事情で送ることが無理だというような状況からやっぱり不適應、長期欠席者になってくるという生徒も少なからずいるという状況であります。

また、コミュニティ・スクールの枠組みを活用した支援体制ということで、本校組合の雇用としてコミュニティ・スクールのコーディネーターを配置していただいております。この先生を中心に学校支援ボランティアを募り、生徒に対応すること、また、そういうようなことから、子どもたちの気持ちを少しでも和ませ、また、エネルギーをためてということができないか、職員で考えてやっていけたらということでもあります。

(4)の家庭ぐるみの支援体制の充実です。3市村の先生方、福祉関係の方々には、本当によく連携していただいて、本当に感謝であります。いろいろな生徒が多いものですから、さらに今後もスムーズな支援につなげていくことを取り組んでいきたいと思っております。

また、(5)です。今井地区福祉ひろばなどの公共施設を利用した居場所づくりということです。

今井地区には福祉ひろばなどがあるんですけども、先日、1学期ですかね。卒業生が、学校からの帰りに、福祉ひろばでほっとして休んでいる姿を見て、本校の教頭がセンター長に相談して、ここを何か使えないですかねと言ったときには、ぜひ見て、使えるなら使ってくれていいよということで、こういうところに何かボランティア、または学習支援、私たちが出向いて、子どもたちに学習指導、また相談ができるような体制が組めればなというようなことも考えております。

以上も含めまして、あと、学校として取り組むこと、授業づくり、また、仲間づくり、学習の充実等を含めまして、取り組んでいきたいと思っております。

来年度、グループワークトレーニングというものも、先日、松本大学の名誉教授の犬飼己紀子先生に来ていただきまして、ご指導いただきました。3学期も指導を受ける予定で、来年度、それを学校の中に定期的に入れていくことも、今、職員と検討しているところです。

いろんなところで子どもたちの支援をできるように、また、家庭の支援をできるように、連携をできるように取り組んでいきたいと思っております。

本日はお世話になります。よろしく願いいたします。

事務局長(藤森 誠) それでは、説明を続けさせていただきたいと思っております。

続きまして、本日、アドバイザーとして参加いただいております横林不登校支援アドバイザーから、鉢盛中学校の傾向や支援の状況について、お話を伺いたいと思います。よろしくお願いいたします。

松本市教育委員会不登校支援アドバイザー（横林智子） 不登校支援アドバイザーの横林智子と申します。よろしくお願いいたします。

座って、説明させていただきます。失礼します。

鉢盛中学校の傾向について、付け加えをさせていただきます。

これは、松本市全体でも言えることなのですが、小規模小学校から中学校に進学するとか、複数の中学校に進学するため、1校に進学する人数が少なくなってしまう生徒の中に、小学校では欠席がほとんどなかったのに、不登校になるケースがあります。

また、クラス替えで友達ができないという理由での不登校もあります。クラス替えで不登校の改善がなされることももちろんありますが、新たな不登校につながることもあります。

元気アップ相談担当医師の松南病院の宮坂先生は、今の子どもたちは変化にとても弱いというふうにおっしゃいます。このようなことは、どの子にも起こりうることでありますので、お一人、お一人、しっかり見ていただくようお願いをしているところです。

次に、支援の状況についてですが、3点、不登校関係者会議と今井地区の支援体制、小学校訪問、それから、地域での公共施設を利用した居場所づくりについて、お話しさせていただきます。

1点目は、不登校関係者会議と今井地区の支援体制についてです。

不登校関係者会議は、先ほど校長先生からも言われましたが、年に3回、大体、5月、9月、3月に行っております。

不登校の生徒について、お一人、お一人、現状把握をし、支援の方向を探り、誰がどのように対応していくのかを考え合っています。山形村、朝日村では、小さい頃から担当の方が関わりを持ってやってきておられるので、家庭の状況等を把握されていますが、学校から指摘がありました今井地区の場合は、保護者から困っているという相談が地区保健師や子ども福祉課などにあれば、対応ができるんですが、つながりがないのにこちらから家庭に入り込んでいくことはできません。

そこで、まず、現状を知っていただくことから始めようと、3年前からですが、地区の保健師さん、それから、昨年から子ども福祉課の係長と地区担当に関係者会議に出ています。

支援体制の構築という点では、スクールソーシャルワーカーを必要な家庭に入れていただくことが、地区担当の職員にうまくつながっていく方法であるというふうに思います。今年度は、火曜日、水曜日の3時から5時、学校支援センターで、スクールソーシャルワーカーが直接、教頭先生や担任の先生等と電話でお話をして、アドバイスをしたり、自分がどのように支援に入っていくのかを話し合ったりする電話相談を行っております。

先日、鉢盛中にもアドバイスさせていただき、昨日、飯田先生からお電話をいただきました。やっぱりこのシステムを大いに利用させていただき、家庭への支援に役立てていただきたいなというふうに思います。

2点目ですが、小学校訪問です。

今井小には年3回の訪問、山形小、朝日小への訪問は年1回、中信教育事務所のいじめ・不登校相談員、小林先生に同行させていただき、今年で3年目になります。柳生校長先生が着任されたときからやっています。松本市内の小学校を訪問して感じていることや、実際のケースへのアドバイス、中間教室や安曇小・中学校の様子などのお話をさせていただいております。

具体的にお話しした内容を一部紹介させていただきます。

中学校での不登校が改善するケースでは、勉強がある程度できるということがとても大きいです。不登校の防止という点でも、学力をしっかりとつけて鉢盛中に送り出していきたい。

得意なことがあると、勉強が苦手な生徒でも学校に元気に登校しています。何でもよいので得意なことをとことんやらせてその力を伸ばし、自信を持たせ、夢中になること。自分のやりたいことを見つけて中学校に進学させたい。

不登校の子は自信がない子がとても多いです。いろんなことを小さいうちにいっぱい体験させ、失敗体験もとても大事で、そんな失敗もしながら、自分らしく、私ってなかなかのものというように育てていただきたい。

松本で最近気になっているのが、一人っ子の不登校児童についてです。特に男の子に注意が必要で、父親の姿が見えてこない家庭は、母子分離がなかなかできず、中学校でも苦勞しているケースが何件もありますので、そんなお話もしました。

また、対応に苦慮しているのが、母親が精神を患っている方への対応です。子育て支援課との連携等についても考えました。山形村は波田地区と隣接していることから、あかり教室の状況や安曇小・中学校で不登校の改善がなされている児童・生徒がいますので、そんな情報も提供しております。

3点目は、学校からご提案のあった地域での公共施設を利用した居場所づくりについてです。プリントをお配りしていますので、ちょっと見ていただきながらお願いします。

今年度、10月からですが、松原地区公民館をお借りして、毎週木曜日の1時から4時まで、「ほっとスペース松原地区公民館」を開催しています。開催の動機は、父子家庭、兄弟で不登校になっている生徒のお父さんからの相談でした。このお父さんとは3年前から関わりを持たせていただいておりますが、なかなか改善の糸口が見つけられずにおりました。この地域には中間教室やフリースクールがありません。山辺、鎌田の中間教室も遠く、母子、父子家庭も多いので、中間教室等への送り迎えが難しい状況になります。この兄弟も、自転車で山辺中間教室に1回行きましたが、大変だったようで、えらい目に遭ったということで、継

続した通室にはなりませんでした。

そこで、学校に行かれない子に自力で行けるとところに居場所をつくりたい。また、週に1回外に出られるようにして、通信制の高校に進学できるように支援したい。高校に進学してからも、気軽に相談できる場所をつくっておきたい。先ほどの今井の公民館に卒業生がやってきたみたいなの、そんなふうにしたいということで始めました。

現在の利用者は、5年生が1名、6年生、1名、中学1年生、1名、中学2年生、3名、中学3年生、1名の計7名で、このうちの1人は、外に出るきっかけができて、短時間の登校ではありますが学校に復帰したので、2回来ただけで、もう来なくなりました。学校にも行っているし、この場も利用してくれている生徒が2名、そして、この地区でない方も2名いて、うち1人はバスを乗り継いで来てくれています。今までに11回開設をして、延べ26人の児童・生徒、13人の保護者、31人の学校の先生を含めて支援者のご利用をいただいています。

松原地区公民館のセンター長さんや公民館長さん、公民館主事さんほか、みんなで支援をしてくださり、11月1日付の松原地区公民館便りに、地区の皆さんに周知していただいています。そしてまた、この時間に並行して行われるふれあい健康教室の参加者の方にも、会の中で子どもたちを温かく見守っていただくようお願いをさせていただきました。

スタッフは、私と、それから、そのプリントにもありますが、あるぷキッズ支援室で、中学校を一緒に回ってくれている上原さんという方が担当して、あと、中学校の先生とか、それから、この地区担当のスクールソーシャルワーカーの塚原さん、また、その人たちが来られない場合もありますので、学校支援センターの指導主事なんかと一緒に支援をしてくれています。

やっている内容については、そのプリントにあるような内容なんですけど、やっぱり自信のない子どもたちが多いもんですから、失敗体験をしない。すごいじゃん、さすが、天才とかとって、自然に口から出るような、そんな活動を考えてやっています。

よい点としましては、歩いて来られること。知っている場所であるので、気軽に来ることができる。狭い家とは違って、体を思い切り動かすことができる。中学校の先生も、学校の近くにあるので、顔が出しやすく、生徒と交流ができること。そして、私が学校長宛てに報告書を提出することで、出席として扱っていただけることです。

課題といたしましては、週に1回の滞在ですので、気圧の変化とかに弱い子どもたちなので、天気、天候によって、体の調子が悪くなったりして来られないということがあります。せっかく駐車場まで来たのに、中に入れないということもありました。10月14日と12月2日は、誰も来ませんでした。

学校から近い公民館なので、学校が終わった後に遊びに来る子どもたちに会いはしないか。会いたくないとびくびくする子どももいます。地域の知っている人と会うことがよい場合もありますが、嫌ということもあります。

それから、ほかの利用者との兼ね合いで、毎回、広い場所を使うことができません。運動をやりたくてもできない日もあります。

それから、6人の児童・生徒が一度に来てくれたことがあって、そのときは、中学の先生もいてくれたので、まだよかったんですが、2人で6人も対応するというと、みんな、自分を見てほしい、声をかけて認めてほしい。関わってほしいと思って来る子どもたちなので、満足できずに途中で帰ってしまった子もいました。

それから、スタッフの確保というのは重要だと思います。

父子家庭の最初にお話ししたご兄弟は、まだこのほっとスペースには来てくれません。この兄弟向けに、8月からプレオープンをして、働きかけを行ってきました。でも、その成果が出たのか、それは分からないんですが、3年間全欠だったお兄さんのほうは、10月から、何とたまにですけれども、1時間から1時間半、中学校に行き始めました。12月は、毎週火曜日、登校して、1時間30分ぐらい、数学に取り組むようになったんだそうです。

このような場をつくって働きかけをすることによって、その子が動き出すきっかけづくりにはなっていくんじゃないのかなというふうに思います。

この「ほっとスペース」に、こわばった表情で入ってきた子どもが、どの子も笑顔で帰っていきます。不登校になると、本人もおうちの方も気持ちが晴れることは少ないと思います。少しでも明るい気持ちになってもらえたら、次につながるエネルギーが湧いてくるんじゃないかというふうに思います。その子が自分で動き出すスイッチを自分で押すことができるようになる手助けができるように、活動は続けていきたいなと思っています。

以上でございます。

事務局長（藤森 誠） ありがとうございます。

ただいま、中川校長先生と横林アドバイザーから説明をいただきました。ここからは、自由にご発言をお願いしたいと思います。

ご質問やご意見などありましたら、お出しいただきたいと思います。よろしく願いいたします。

教育委員（百瀬司郎） 朝日村の百瀬です。よろしくお願いします。

今の説明をお聞きして、質問させていただきたいことが一つあります。

中学校の資料の1ページ目の数字なんですけれども、真ん中の辺の長期欠席状況の中で、病気という欄がありますが、これは、県とか全国平均は0.8程度であるのに対して、鉢盛中は5.29という非常に高い数字が出ています。この鉢盛中だけの傾向なのか、それとも、例えば、松本市全体を見ると、やはりこういう数字が見えてくるのか。そこら辺のところはいかがでしょうか。

松本市教育委員会不登校支援アドバイザー（横林智子） 私のほうから申します。

全体的に見ますと、やはり鉢盛中学校は人数的には多いかなと感じております。

教育委員（百瀬司郎） この病気のところですね。

松本市教育委員会不登校支援アドバイザー（横林智子） はい。

また、資料にも書かせていただきましたが、摂食障害等のお子さんも、ほかの地域ではあまり見られないんですけれども、毎年、何人かはいらっしゃるかなというのも気になっているところでもあります。

教育委員（百瀬司郎） ありがとうございます。

そうすると、その不登校生が多い理由の一つの中に、病気という部分が非常に大きく影響しているとすれば、さっきお話の中にありました、心身の病気によるということがやっぱり多いということで、統合失調症とか、摂食障害とか、お子さんが病気という状況で欠席をしていくということになると、鉢盛中に特化した取組みとして、病気への対応というのは、行政も含めて対応していかないとまずいのではないかなということを今感じたところでもあります。

大きな数字だと思いますけれども。そんなことを思いました。ありがとうございました。
松本市教育委員会不登校支援アドバイザー（横林智子） 鉢盛中学は、元気アップ相談には、毎回出していただいている、それから、思春期相談等にも、やっぱりすごく相談をされていて、早いうちに医療とつながってやっているといういい点というか、早く医療につながるようになってくださっているもんで、病気が見つかって、治療につながっているという、そういうこともすごくあるんじゃないかなということは思います。

元気アップ相談に毎回出してくださるのは、鉢盛中学が件数としてはすごく多いです。なので、早く医療につなげるという、そういうのがうまくできているという考え方もできると思います。

教育委員（百瀬司郎） すみません。今、お話を聞いて、朝日村も山形村もそうなんですけれども、やっぱりゼロ歳から18歳までという、この長いスパンの中で、子育て支援をずっとしていくという取組みはしているんですけれども、そういう意味で、いろんな配慮が必要なお子さんの早期発見に努めながらやっていくという取組みをしているということは、そういうところに表れているというようなことですね。

ありがとうございました。

管理者（臥雲義尚） すみません。今の部分でちょっと関連して、もう一度整理をさせていただきたいんですが、不登校と病気というのは別の種別になっていますよね。

松本市教育委員会不登校支援アドバイザー（横林智子） はい。

管理者（臥雲義尚） ですので、病気という方は、不登校という状況にはなっていないということですか。

松本市教育委員会不登校支援アドバイザー（横林智子） お休みをしているので、学校には来ていらっしゃる方が多いのですが、その中でも、例えば、起立性調節障害という方とか、それから、ドクターから、今は学校のことを考えないようにさせたほうがこの子のためだよというような指示を受けていらっしゃる方とか、それから、先ほど、統合失調症

等の精神の病める方ということで、お休みになってはいるのですが、ドクターから止められたりして、今は治療に専念しているという。あるいは、朝がとても弱くて、午後からは来られるんだけど、ちょっと午前中は難しいとか。詳しい数字はあるんですが、90日以上お休みになってしまっている方もいますし、そうでなくて、30日ちょっとは休んだけど、学校に来られている方とか、お一人、お一人、ケースによって違うものですから。

管理者（臥雲義尚） そうすると、同じように長期欠席をしている子どもの中で、医師の方からしばらくストップがかかっていたりするということ、より状況が深刻なお子さんのほうが病気のほうに入っていると考えていいですか。

松本市教育委員会不登校支援アドバイザー（横林智子） はい。

管理者（臥雲義尚） なおかつ、この病気というのは、要は、心の病気であるということが全てでしょうか。それとも、身体的な病気も含まれているのでしょうか。

学校長（中川満英） それは、どちらも兼ねているということで。

管理者（臥雲義尚） なるほど。

その上で、先ほど、横林さん、お話ございましたが、早い段階から医療とつながっているがゆえに発見が早く、顕在化している。だから、数も増えているんだというご発言ございましたが、そういう意味でいうと、かなり数字として5.29というものの大きさだけ見ますと、非常に鉢盛中学が特殊で深刻さの度合いがすごく大きいというふうにも、この数字だけだと見えますが、直ちにあまりそう考えないほうがいいということでしょうか。

松本市教育委員会不登校支援アドバイザー（横林智子） 病気の皆さんは、それぞれ必ずどこかのお医者さんに関わりながら、今、やってきていただいているので、結構状況としたら厳しい状況の方もいらっしゃいますし、午前中だけ休めば大丈夫の方もいらっしゃいますし、そこら辺は何とも。

学校長（中川満英） 起立性調節障害、例えばあっても、1日まるっきり休むという方もいれば、やっぱり朝は厳しいけれども、10時頃から登校できる。でも、やっぱり30日という数字を超えると、今の制度で1とカウントしてしまうので、今、横林先生言われましたように、本当に現時点で90日ぐらい欠席の人もいれば、31日のお子さんもいらっしゃるの、この数字だけではないんですけども、私たちとしては、その子どもたちの状況の変化を大切にしてお取り組みしております。

管理者（臥雲義尚） 分かりました。ありがとうございます。

事務局長（藤森 誠） ほかに。

職務代理（根橋範男） すみません。先ほど、横林先生からもお話あったんですが、小学校段階で、中学へ進むに当たって、小学校のときに、こんなふうに対応してほしいという話があったんですけども、山形の場合、結構もう小学校段階から不登校になっているという児童が多くて、今現在、今年度ですが、6名、不登校になっています。

要因としては、さっき、校長先生おっしゃったように、様々なものが複合的に併さって、

これが特定の要因だというものがなくて、とても難しいケースになっています。ケース会議を開いたりして、いろいろ対応したりしているんですが、好転しないという状況で、じゃ、どうしたらいいのかと。多分、山形の子どもの不登校がそのまま中学へつながって、不登校という状態になっている生徒もかなりいると思うものですから、どうやってぐちゃぐちゃしたものを改善していく方法があるのか。どうやったら中学にうまくつながるのか。その辺はどんなふうに考えたらいいですかね。

松本市教育委員会不登校支援アドバイザー（横林智子） やはり松本市内でも、小学生の不登校というのは増えてきていることは確かでございます。

それで、先ほど、お話しさせていただいたんですが、やっぱり小学生のうち、家庭ですとか、学校ですとかの環境の変化に非常に弱かったりしますから、このコロナの影響もかなりありまして、例えば、1年生なんか、頑張って、最初、行こうと思ったときに、去年なんかは最初のところがなくて、始まっちゃって、先生方も早くやらなきゃみたいなので、わっと進んだがために、子どもがそれについていけない。

そして、夏休みが、今、長くて、30日ぐらいあるので、それで、えっ、こんな楽な生活があるんだなんていうふうに思った子どもたちが、そのままゲームやったり、それから、生活リズムが崩れちゃって、昼夜逆転みたいになったために、休み明けから来られないとか、そういうこともございます。

また、大きい子どもたちの中にも、いろんな習い事なんかもして、いっぱい頑張ってやってきて、それがコロナのときに全部がストップして、えっ、こんな楽ちんな生活があるのかなんていうのから不登校になってしまった、そういうお子さんもいらっしゃいます。

なので、そういうのをまた改善させていくというところがとても今難しいところで、おうちの方と一緒に、それこそ本当に支援会議をしながら、お一人、お一人、改善をしていく。

例えば、パジャマですっといないとか、顔はちゃんと洗いますとか、朝はカーテンを開けますから始めるようなおうちの方もいらっしゃいますし、それから、スクールソーシャルワーカーですとか、支援地域の保健師さんなんかに入っただきながらやっていかなければならない家庭もございまして、やはり、お一人、お一人、今やっていただいているようなことを積み重ねていく。そして、それが中学段階では駄目でも、何か高校に行くと、意外と高校に行かれるとか。それから、高校にも行かれなかったんだけど、2年ぐらいたったら、高校に行きたいですと学校に来たりする子も結構今おります。

なので、長い目で、この子をどんなふうにしていきたいのかなというのをみんなで支援するものを持ちながら、今、どんなふうはこの子に接していけばいいのかなというのを考え合っていくことかなと思って、松本でもやっているところでございますが、なかなかやはり難しい。すぐに好転する場合がありますけれども、なかなか難しいことのほうが多いのかなと思っています。

事務局長（藤森 誠） ほかにございませんか。

教育委員（平林昌廣） 今の話のところで、どうしても不登校気味の子どもたちへの対応という部分は、いわゆるケーススタディーというか、どうしても個々のそれぞれ抱えている事情というか背景が非常に多岐にわたりますよね。そのところで、今特に学習の遅れ、心の病というか、その一つ大きな要素としての学びの部分で悩んでいる子どもたちが増えてきているところに関わって、私、今は風の人ではなくて土の人で、地域に生きていますので、そんなところでちょっと学び直しというところに中川校長さんがまとめてくれた一番最後の学校としての取組みの4番のイの（ウ）のところに、ICTの活用による学び直しとありますけれども、学び直しというところにウエートをかけて考えたときに、特に私ども、8,500人強の村の中なので、ある特定の子どものところに焦点を当てながらというよりも、もう全ての子ども、山形っ子、今、鉢盛中学のことについて議論していますので、鉢盛っ子を対象にして学び直しをしていくようなことを、地域として何か支援できればいいなというように思っています。

それは、今まで、学校支援の形でいろいろ中学校へ入ってきたんですけども、小学校さんへの入り方は非常に私どもはスムーズにできました。3市村が関わっているこの組合立の中学校さんへの関わり方は非常に難しいというか、特に行政的に考えて難しいところがあるようで、私ども、なかなか突っ込むことができなかったということがあります。

山形小学校へ関わってきてとても思うことは、7、8年関わっているんですけども、やっぱり、校内教育の部分と、それから学校の外の部分との相互の連携というか、融合というか、学社融合の形の学び直しというのが非常に大事ななというふうに思っていて、それを今、中川校長先生からご提案があったように、鉢盛中学校のコミュニティ・スクールを立ち上げるというところに今、力を入れてもらっていますので、そこら辺が1個突破口になって、学び直しというようにところに私ども、ご支援できればいいなと思っている。

特に、今は多分、先生方非常に多忙にも関わらず、子どもたちに学んでもらいたい教育内容は非常に高度になっていると思うんですよ。だって、主体的で対話的で深い学びですよ。じゃ、そこに必要な派閥的な議論をする前の基礎木をどうやってつくるんだというところで、もう先生は苦慮していると思うんだよね。

そこで、やっぱり小・中の連携だとか、保・小・中・高・大の連携というようにところで、手を結び合いながら、地域として何か支援ができることがあればいいなというように思っています。

今は、やっぱり地域と学校との分業に基づく協働という、地域学校協働活動の部分を何とか実践していかないと、たくましい鉢盛っ子、たくましい山形っ子、朝日っ子、今井っ子を育てることは難しいかなと、そういう時代に来ているかなというように思うんですよ。

だから、不登校の子どもたちへの個々の支援、ケーススタディーについての支援の仕方、仕組みをどうしていくかということと同時に、やっぱり全ての子どもたちの、特にたくましい力を、学力をつけていくための工夫というのを、考えていかなきゃいけないなと。特に、

行政区が違いますので、そこでの地域の小・中の連携の在り方、学校の職員の連携というのは結構できていると思いますので、そのところを考えていけるような仕組みができていくといいなというように思っています。

特に8,500人の村の中での基本的なスタンスはそういうことで、全ての子どもたちに、今、未来塾もやっているし、山形っ子もやっているし、気軽に来てよという形で、活動しているようなことが中学校までできていくといいなと。中川先生のビジョンと同じような考えを持っているので、ぜひ、中学校でも、地域に対して発信してもらおうとありがたいなと。その一つの突破口が今コーディネーターをやってくださっている方の我々への発信かなと思っています。

したがって、学校支援地域本部とか、山形小学校学校運営協議会という形だと、どうしても山形小学校さんというところに焦点が行くだけけれども、やっぱり組合立のこの鉢盛中学校さんの学校運営協議会というようなものを充実していくというのは1個大きなこれからのヒントになるかなというように思っています。

管理者（臥雲義尚） 今、平林さんからのご指摘があった組合立であることの特異性といいますが、分業に基づく協働活動、学校内と学校外の融合をと、これが非常に重要であるということの認識を皆さんが共有はしていると思うんですが、それを実現するときに、組合立であるがゆえに、行政の長も、あるいは教育委員会も、それぞれがまた議会を持ちという状況の中で、どうしても同じ方向に向かってスクラムを組むということに、少しワンクッション、ツークッション出てしまう。

これを克服するためにはどうすればいいかということ考えたとき、私、それぞれの市村においても、大きな方向性として大事だと思うんですが、要はやっぱり学校長の権限というものを、特にこの組合立の鉢盛中学校においては、より大きなものとして我々が、行政側も教育委員会側も認識をして、実質的な形で何か動かす必要があるんじゃないか。その通常よりも大きな権限を持つ学校長のところに、それぞれの今井、山形、朝日の地域の皆さんが寄り集まり、そして、平林さんおっしゃった分業に基づく協働活動というものをやっていく。そのときのやっぱり中心になる存在がより明確に学校長であるということ、この組合立の場合にはつくらないといけない。どうしても市長とそれぞれの2村長、あるいは教育委員会もそれぞれがあって、分立のほうが強くなってしまふ。今日の議論を聞きながら、それを実態的に、制度的に学校長の権限をしっかりと担保できるようなことを、ぜひ、それぞれの3市村長、または教育委員会として議論をして、方向性を見いだしていけないかなと、話を伺いながら感じました。

教育委員（百瀬司郎） 付け加えなんですけれども、今、平林さん、それから臥雲市長さんのお話を聞いて、やはり、3市村の組合で構成されているがために、なかなかのやりにくさというのをやっぱり正直なところ、ありまして、例えば、未来塾を始めたいきさつもそうなんですけれども、子どもたちに学力をつけてやろうというような取組みをしたい。だけれど

も、それぞれの教育委員会でやっていくというようなことしかなかなかできないというのが正直なところでありまして、そういうときに、やっぱり、鉢盛、自治体が一つであれば、もうすぐぱっとできるんですけれども、この3市村の行政区のために、そういったことがなかなかできにくいとすれば、やはり、今、臥雲市長が言われたように、学校長がひとつ声をかけて、その上で、この3市村が何とか力を合わせてやるというような動きが出てくれば、ひとつ、大きな動きになるんじゃないかなというふうに思いました。

特に、不登校の子どもたちの居場所とか、今井の公民館とか、福祉ひろばですか、利用して立ち上げができそうだとのことですが、やはりそういった不登校の子どもたちが入っていけるような施設の立ち上げみたいなものを3市村の場所でうまく連携して入っていければ、本当はいいのかなと、今思ったわけでありまして。

以上であります。

教育委員（宮澤美香） やっぱり市町村のばらばらというのは、子どもたちにとっては、友達は今井にもいたり、松本市にもいたりするのに、何かやるとなったら、山形だけという。だから行かないという、あの感じがちょっともったいないなどはずっと思っていたんですけども、一緒に鉢盛という枠で何かあれば、子どもたちは行きやすい場所にもなるのかなと思っています。

やっぱり居場所づくりというのは、多分、今の時代になったからすごく必要になってきたのかなと思います。昔はどこかの、何か広場で遊んでいるという、そうしたら友達が誰かどうかいて、遊べる場所があったけれども、今、出ていく場所もないし、結局、家にいたら、オンラインゲームをやる。友達とつながっている感があるという、感じはしているという。それでももう終われるという世界になってきているので、でもやっぱり人と会うというその感覚も、やっぱり子どものうちには大事なかなと思っているので、場所の提供は大人じゃないと今は難しい気がしていて、でも、それを大人の感覚で、これをつくったから、子どもたちおいでというのじゃなくて、子どもたちがこういう場所なら自分がリラックスじゃないけれども、ストレスが過度にかからずにいられる場所という、その視点で、ちゃんとした居場所をつくっていかないといけないのかなと思いました。

教育長（伊佐治裕子） 先ほど、松本市の中間教室の話がありました。中間教室、3か所ありますけれども、先日、教育文化センターの中にある山辺の中間教室を2回ほど訪問をして、子どもたちの様子を見てきました。

中間教室は、利用がちょっと低迷しているときもありますが、山辺は今、大変賑やかになっていて、15人から20人くらいの小学生を中心とした子どもたちが、本当に生き生きと、この子たち、本当に不登校なのかなと思うくらい元気な様子で活動しています。それぞれの自分の好きなことをやりながら、そして、片隅で学んだり、絵を描いたり、生き生きとしている様子がありました。

その指導員の先生に伺ったのは、この15人のグループの子たちは、それぞれやっぱり特

性があって学校になじめないことでここに来て、その15人のそれぞれ特性がぶつかり合うこともいっぱいあるんだけど、その異年齢集団の中で、自分たちで話し合って折り合いをつけて、何とかうまくやっている、だから、楽しいから、多分、ここに来ているんだろうというお話を聞きました。

その話を伺ったときに、冒頭でご挨拶したときにお話した少人数の集団の中で、子どもが生き生きと主体的に遊んだり、勉強したりすることの中で、本来の子どもの姿でいられる。こういうことができるんだとしたら、本当は学校でこういうことがそもそもあればいいのにと改めて感じました。

そういった意味では、今までの学校教育で、30から35人の学級の中で、先生の話聞いて学ぶということが大きく転換期に来ていると思いますし、今までの常識として、皆が学校に求める姿というものを、私たち大人がもう少し緩やかに考えてあげることが子どもたちの息苦しさをなくしていくことになるんじゃないかなと思いました。

先ほど、横林先生からは、子どもたちが松原のほっとスペースに来たときに、大人に構ってもらいたいと言っておられましたよね。それと、リスタートできる子は、やっぱり勉強をして、自信をつけることでリスタートできる、立ち上がっていくことができるという、その2つが、私は大きな要素だと思っていて、学校以外でもそういう人の温かさに触れることができること、そして、自分のペースで学び直しができる居場所を子どもが自分で歩いて行ける場所につくってあげることが、今、必要なんじゃないかなということを改めて感じました。

それから、校長先生に伺いたいんですが、グループワークトレーニングということを取り入れていきたいということで、学校訪問のときに少しお聞きしたんですが、そのことをもう一回お聞きしてもよろしいでしょうか。

学校長（中川満英） 今年度からお世話になっている中で、本校は、毎年、クラス替えをやっております。いろいろな経緯があって、何年か前からやっている中で、それはそれで大切にしていきたいと思っているんですが、先ほどの横林先生の宮坂ドクターの話じゃないですけど、やっぱり今の子どもたちの関係づくりは、いろいろこっちがある程度場を与えたり、ある程度の取組みのスキルを与えていかないと、非常に難しいなと感じています。

そういうところで、自分もこれまでのいろんなところで勉強させていただいた中で、グループワークトレーニングというエンカウンターに近いものの一つですけども、いろんな活動を通して、子どもたちが関係づくりをしていく。そういうものを入れていかないと厳しいだろう。取り入れていかないと、いろんなところがうまくいかないんじゃないかなということを感じています。

そういう中で、かつて教えていただいた犬飼先生という先生に先日も来ていただいて、2年生のほうで、全学年でやっていましたけれども、2年生もこんなに周りの生徒と関わっていろいろできるのが楽しいことなんだ、本当にうれしかった、と感じています。あと、先生

方も、あんな子どもたちが、特別支援のあの子たちが、最初は無理だと言った子たちが、あんないい顔してやっているというような言葉をいただいたので、それを今度は3学期は1学年でぜひやりたいということで、取り入れていきます。

そういうようなところで、学校の中でやっぱりクラス替えもあるので、有効的に子どもたちの関係づくりという場をつくっていききたいなと考えています。それだけではとても解決しないかもしれませんが、期待しています。

以上です。

教育委員（根橋範男） 引き続き、校長先生にお伺いしますけれども、校長先生、この不登校に対応していくのに、行政に対してどんなことを期待するかなと、そんなのは何かあるんですかね、お考え、ありますでしょうか。

学校長（中川満英） 行政というか、自分が、今、山形村も朝日村も、未来塾やいろんな、土曜日の学習の塾もやっていただいている、本当にありがたいなというふうに感じています。

そういう中で、平林先生からもお話ありましたが、今、子どもたち、体験とか経験が不足しているなというのはとても感じていて、それを何か学校と連携する中で、子どもたち一人ひとりにいろんな体験を、経験をさせたいなということは思っていて、今、コーディネーターの先生といろいろ策を練っていますが、そういうところで行政の方々と関わり、いろいろサポートしていただくとありがたいなと思っていますが、やっぱり、職員の勤務時間ということとか、子どもたちのやらなければいけない授業量とか、いろいろなことを考えていくと、非常に難しく、そこをいつもぐるぐる頭を悩ませる、正直なところですが、何か動いていきたいなということを感じています。コーディネーターの先生がやる気満々ですので、ぜひまたお願いしたいと思います。

以上です。

教育委員（平林昌廣） それで、未来塾の、今年から小学校版ができるもので、小学校のほうを午前中にやらせていただいて、午後、中学校、鉢盛っ子ということでもって十数人来ていますけれども、びっくりしたのは、やっぱり一つは、信大の学生さんが入ってくれていますけれども、その学生さんたちとの対話というか、それが非常に子どもにとっては、我々はとてもかなわないような力を持っております。

それから、そういう話の中で、ちょっと休憩時間なんか感じたのは、発達段階に応じた学びというのがあるんだなということ。うちの村、朝日村も今井小もそうだけれども、道祖神が非常に多いんですよね。その道祖神について、小学校の三、四年生の頃、今ちょっと閉館していますが、資料館で道祖神についての学び、それから、実際の道祖神を見ながら学ぶ授業というのがありますが、そこでは、何となく、ああ、こういうものがあるかという形で見ていた子どもが、今、中学1年生の子どもたちなんだけれども、この間から、鉢盛中学校でこういうふるさと学習をやってくれて、先生、もう一回、このふるさとの中を回って見たら、ちょっと毎朝、通学時に行き会う道祖神の表情が違うんだよねと話をしてくれ

るんですよ。

だから、やっぱり発達段階に応じた学びというのを、地域の我々も考えていかなきゃいけないなというように思いました。

それから、信大の学生さん、理系の学生さんが多く入ってくれているんだけど、今、大学で講義しているノートを持ってきて、中学生と一緒に聞いたりしていると、ちょうど中学生も分かるような部分があるんですよ。やっぱり懂れというか、そんなようなものを持ってたり、ファンができてきたりして、非常に私ども、ありがたいなという、ありがたい触れ合いができているなというように思っています。

そんなことが、百瀬教育長が今言ったように、朝日とか、今井とか、一緒にできればいい。山形とか、朝日とかという話じゃなくて、一緒に、鉢盛っ子、みんな来いよという話になっていくといいなというのが私どもの夢。今のところ、持っている夢。

事務局長（藤森 誠） ほかにご意見ございますでしょうか。

教育長（伊佐治裕子） 先ほど、管理者のほうから、校長の権限ということをより強く意識していてもいいんじゃないかという提案をいただいて、ありがたいと思いました。

というのは、やはり、この一部事務組合というのは中学校の管理、運営のために設立をされているため、本来なら通常は学校として独立した権限を持って校長がいろいろやっていくことになるのですが、この議会があるというところが、よく言えば、皆で支えているということもありますけれども、重たいということも逆に言えるのかなと思います。皆さんのお話を聞いていて、今、地域でやっている子ども支援が、それぞれの行政体でやることの温度差があったり、区域にこだわると、子どもたちが来れる範囲が限られてしまうということがあるんだなと改めて気づかされました。

先進的にやっていただいているこの山形未来塾という居場所は、山形村さんが立ち上げてくださった取組みなんですよけれども、そこで、鉢盛の子たちを受け入れてくださることができれば、それもありがたいと思いますし、それが山形だけではなくて、朝日村と、松本市の今井地区でできることがあれば、同じようなことを校長先生のご助言の下に整えていくのがそれぞれの構成市村で今必要なことなのかなということを感じました。ぜひ、校長先生には大胆にいろいろ提言をしていただいて、必要な予算があれば、組合議会に認めてもらってやっていくということもできると思います。

前向きにこの仕組みというのを捉えて、ほかの学校ではできないことを、ここで、リーディングスクールのようにしてやっていくということができればいいなと思いました。

管理者（臥雲義尚） 今、伊佐治教育長が指摘をされた部分で、例えば、教育長から頂いた資料の課題と検討事項の幾つか出していただいている、先ほどから話題になっている学校の外、地域の話という部分については、本当に校長先生から発信をしていただければ、それを受けて、それぞれの3市村で、ある程度足並みをそろえて、じゃ、公共施設を利用した居場所づくりをそれぞれ進めようじゃないですかとか、校長先生発、そして、それぞれの市村が

問題意識を共有して、実際に実行するという一方で、ぜひ、これは取組みを進めたいと思います。

それともう一つ、ここでいえば(1)に当たる、究極はやっぱり先生方の数が少ない。職員を増員してほしい。これは、最も切実で、最も中核的な、今、やはり、この教育をめぐる問題だと思います。これは、松本市立の小・中学校でも非常に重要な課題になっていますし、それぞれの村の小学校においても同様ではないかなと思います。

これを、今度は、足並みをそろえろとか、現実に予算をどう使ってそれぞれの学校に増員を実現していくかとなると、実はこれは非常に難しいところがあって、先ほどの議会やほかの政策との優先順位とか整合性が村、市政ごとに必ずしも同じじゃないとすると、鉢盛中学校に増員をしよう。それと、松本市内のほかの中学校で、じゃ、同じようにやるのか、やらないのかと、こういったような問題と、どうしても向き合わざるを得なくなるなというふうに思います。

しかし、この中学の問題を抜きに、この不登校、不適應はもちろんです、そのほかの教育の問題も、最終的には課題解決に、中学の先生の増員の問題抜きにはできないということ、皆さん共通の認識として持っておりますので、今後、松本市の多くの中学校においても、それぞれ大規模校や小規模校、事情が違うものに、いい意味の多様性を持ちながら学校づくりを進めていきたいと思っております、この組合立鉢盛中学校の存在というのも、先ほど、伊佐治教育長からリーディングスクール的な意味合いをというお話がありましたけれども、何らかの形で、こうした教員増員というような中核の問題について、もちろんそれは予算と非常に密接に関わる部分についても、しっかり俎上にのせて検討できるようなことをまず考えたいと思っております。

また、これは、本来であれば、この教員の人事とか予算という部分は、都道府県の責任を持つ領域でありますので、市村としての取組みと、都道府県に対してしっかり働きかけをするということも並行して行っていかなければいけないと思います。

教育長(伊佐治裕子) なかなか先生が見つからないという悩みもありますね。

予算を増やしてもらっても、適正な人がなかなか見つからないということもありますよね。
管理者(臥雲義尚) そうということですね。

学校長(中川満英) そうですね。

支援員とかそういったことも、ほとんど見つからないという状況ですね。非常に厳しい。それぞれの市町村がみんな困っているということだと思います。

事務局長(藤森 誠) ほかにご意見ありますでしょうか。

(発言する者なし)

事務局長(藤森 誠) それでは、これで意見交換を終わりにさせていただきたいと思いません。

最後ですけれども、その他、全体を通して、何かご意見等ありましたらお願いしたいと思います。

います。よろしいでしょうか。

(発言する者なし)

事務局長(藤森 誠) では、ありがとうございました。

本日予定をしておりました議事はこれで終了となります。

限られた時間ではありましたが、有意義な意見交換ができたと思っております。ありがとうございました。

いくつかのご提案をいただいておりますので、事務局でもしっかり整理をさせていただきたいと、こんなふうに思っています。

また、本日の内容につきましては、議事録を公表させていただくとともに、2月18日に予定しております2月定例会においても、議員の皆様へ報告をさせていただきたいと思っておりますので、よろしくお願いいたします。

閉会の宣告

事務局長(藤森 誠) 以上をもちまして、令和3年度第1回松本市・山形村・朝日村中学校組合総合教育会議を閉じます。ありがとうございました。